



手が動かしにくい体験

宮地小学校の福祉教育のねらいは、「共に生きることやふれあうことを通して、自他のよさを認め合い、人を大切にし、自分にできることを見つけて実践していく」ことです。
 四年生では、総合的な学習の時間に「お年よりとふれあおう」という学習をしました。お年よりのことをよく知り、思いやりの気持ちをもち、自分たちに行えることを実行していこうというのがねらいです。

一・疑似体験
 お年よりの体についてよく知るために、お年よりの体についての疑似体験をしました。
 一つ目は、「体が動きにくい」ことの体験です。子どもたちは、「とても体が重くて動かしにくい。」「とても体が重くて動かしにくい。」「階段は手すりがないのは怖くてできない。」という感想をもちました。
 二つ目は、「手が動かしにくい」ことの体験です。手袋を二枚重ねて、折り紙を折ってみたのですが、二つに折ることがとても難しいようでした。そして、ねじを回して

子ども達は「認知症」についてサンビレッジの先生のお話を聞きました。認知症は様々なことが原因で、できていたことができなくなったり、今までの生活が送れなくなったりします。脳のいそぎんちやくのような手が、緑や赤の大事な球を少しずつキャッチできなくなるといふことでした。しかし、年を重ねていろいろな経験をしていって、お年よりに尊敬の気持ちをもって接することが大切だと考えました。

二・認知症の話

三つ目は、「見えにくさ」の体験です。めがねをはめて文字を読みます。大きな字から、だんだん小さな字になり、白い字の方が見えにくくなりました。
 これらの体験から、お年よりは、こんなに体がつらいので、なんとか自分たちに行えることはないだろうかと思えるようになりました。

池田町立 福祉活動
 宮地小学校
 ~福祉協力校の活動紹介~



話を聞く子どもたち

四・感じたこと

A子さんは、自分のひいおばあさんが、自分の名前を何回も聞いたり、年を忘れたりするので、そんな時には何度でも言ってあげたいと思うようになりました。
 B男さんは、耳の不自由な人には、耳元ではっきり話したり、手を取って説明することが大切だと分かりました。
 C子さんは、百歳になるおばあさんが元気にゲームをされている姿を見て、自分もずっと元気になりたいと思いました。

五・学んだこと

これらの体験を通して、子ども達は多くのことを学びました。お年よりに対して、喜んでいただけるように自分から進んで関わっていくことや、一人一人の体の状態に応じた接し方をする事の大切さに気付きました。さらに、自分自身が相手の気持ちを尊重する心が最も大事であることが分かりました。そして、もともとと勉強して、自分にできることを一つでも増やしていきたいと思うようになりました。



手作りポーリング

三・「清流の里」訪問

一回目は、学校の近くにあるデイサービスセンター「清流の里」を訪問し、お年よりの方々と交流をしました。初めは緊張して思うように言葉をかけることができませんでしたが、時間がたつにつれて、自分から声をかけることができるようになりました。さらに、どうしたら親しくなるか、その場で考えて声をかけることができるようになりました。
 二回目には、一回目をふり返り「大きな声でゆつくり話すことが大切だ。」ということにも気付き、笑顔で接することに心がけました。職員の方が「笑顔で過ごしてもらいたいです。」と言われましたが、その言葉を実感しました。



トントンずも